皮革の比較史：世界をめぐる「革の道」

第一回 革づくりのアイデンティティ

１．革づくり集団のアイデンティティ

今から数年前、歴史家の藤沢靖介さんが私の授業に客員講師として参加してくれた。彼は大きななめし革を一枚、いきなり目の前に広げて見せて学生たちを驚かせた。工場や屠場などでは日々、日常生活に欠くことが出来ない皮革製品や肉類がつくられている。しかし私たちが牛や豚が殺される場面を考えることはない。革の財布や靴を使い、肉を食べているのに「生きた動物を殺すのは残酷だ」とも考えている。みえない仕事をしてくれている人々がいることで社会がなりたっているのにそれを担っている人々に感謝することを忘れているのだと彼は強調した。江戸時代においても、「獣の肉を食べない」というタテマエでなりたっていた社会をその人たちがずっと支え続けていたのだ。

藤沢さんは被差別部落がどれほど日本の文化の生成に貢献しているかを語り出した。室町時代以降につくられた禅寺の石庭の多くは、ほとんど被差別部落の庭師によるものだったし、歌舞伎や能楽の世界、今や世界的に人気のある「ニンジャ」の多くが被差別部落からでていた。彼らは一般の人々には備わっていない「特殊技能」「異能」があることが一般に認められ、畏怖されていた。

全く聞いたこともなかった話に圧倒されて静まりかえってしまった学生を前に、彼は話を続ける。革づくりをする集団にはもうひとつの生業があった。長吏という役人だ。下級ではあるが、幕府に雇われていた役人として、牢番や犯罪人の取り締まり・処刑にかかわっていた。人々が穢れとして触れることができない事象に携われるのが異能の人々だった。

「被差別部落では農業のほかに皮革を生産していて、そのスペシャリストたちをかわた（皮田）とも呼んでいました。『穢多』（えた）という侮蔑的な漢字をあてたのは徳川幕府です。私はむしろちょうり、という役職で呼びます。皮づくりもしていたが、幕府の末端の行政機構を担っていた役人だったからです。[1]」関東の長吏はすべて弾左衛門という代々の世襲の頭に統括されていた。関東一帯で芸能関係の人々や皮なめしの職人全般を統括し、牢番や犯罪人捕縛、処刑の際の補助仕事への人員配備も請け負っていた。彼らを統括する「治外法権」を認められていたのだ。

彼の敷地は現在の台東区の今戸界隈にあった。760 坪を超える大屋敷を構えていて、大名なみの財政力があり、帯刀も許されていていた。他方、非人集団にも関東一円を治める車善七という非人頭がいて、やはり治外法権を認められていた。かわたが皮なめしの仕事を行い、牢番や刑場での段取りを行うのに対し、非人は物乞いや紙づくり、ゴミ拾い、廃品回収などを主な生業としていた。

江戸は首都としてすでに 18 世紀に人口１００万人を超える都市だったが、欧州からの訪問者たちを驚かせるほど街が清潔できちんとしていたという。それはこのような役割分担とリサイクルシステムのたまものだったのである。

かわた集団は皮革の分野でも幕府に利益をもたらした。鎖国をしているとはいえ、オランダ等を通じて江戸時代にも西欧から奢侈品がはいってきた。そのなかには豪華な金泊を貼った革の屏風があった。徳川幕府が買い上げたが、あまりに高額だったので幕府はその技法をコピーして類似品をつくるようにかわたに命じた。その結果オリジナルを凌ぐすばらしい屏風や文庫がつくられたの

---

[1] 本稿では皮革の歴史を取り扱うので、ちょうりではなく関西方面でよくもちいられている「かわた」という表現を使うこととした。

だった。それは金唐革と呼ばれ、西欧でも kinkarakawa とそのまま呼ばれるほど一世を風靡した。

明治維新以降から、日本はそれまでに例をみないほどの量の革製品を生産しなくてはならなくなる。軍備の近代化と西洋化政策の要求から、西欧式の技術を次々と取り入れ、糠や菜種油を使うそれまでのなめし方からタンニンなめしに移行し、さらに化学薬品であるクロムなめしといった技術をどんどん習得し、日本の近代化に貢献してゆく。

靴やブーツ、サーベルの筒などの皮革製品をすべて自前で調達できるようになるには、技術をもつ専門家たちが多数育たなければならなかった。そのためには資本が必要だった。江戸時代でも、原皮を集めたり、それを集積して加工のために売る商人たちは大きな利益を得ていたが、それらの資本の集積こそが教育ある層を生みだしたり、明治以降の急激な産業革命を担う中小資本家の礎を築いたのだといえるだろう。

弾左衛門は関東の皮革を一手に集積することができる権利を得ていたため、莫大な財産を蓄積していた。明治になって弾左衛門は弾直樹と改名し、軍部と結びついて靴製造産業に進出した。いち早く海外から指導者を招へいし、伝習所をつくって多くの職工や技術者を育てたものの、靴製造業は軌道に乗らず、撤退せざるを得なくなり、晩年彼は破産してしまう。だが財産を傾けて日本の皮革と靴づくりに傾倒した彼が播いた種は今日でも東京の下町で皮革製造や靴づくりの伝統として生き残っている。彼と同時代を生き、鉄砲商として一財産をなした侍あがりの西村勝三もまた、弾直樹とともに日本の皮革産業の発展に貢献した人物でもあった。彼らはしばしば協働し、技術者を育て、工場も隣接して建てた。彼らの貢献なくしては東京の革と靴はありえなかった。一方日本でも有数の皮革産地の姫路では大垣伊三郎が姫路革で輸出に貢献し、姫路皮革製造組合をつくって粗製乱造を規制している。彼らのような人々が明治期に地方でも輩出したことで日本の近代皮革産業が発展したのだ。

２．「腑分けの手」は「癒しの手」？

藤沢さんが皮なめし工場を案内してくれるというので、今度は日本関係の英語での講義をうけている海外留学生たちを連れていくことにした。南千住の駅で待ち合わせ、回向院からフィールドワークがはじまった。回向院の隣は徳川幕府時代、小塚原刑場があった場所で、今は墓地になっている。死者を弔うための、大きな地蔵が立っていて、首切り地蔵と呼ばれている。当時を再現した絵を見ると、当然ながら周囲を囲んでいる家や建物はなくて、原っぱに巨大な地蔵がたっているだけなのが、かえって凄みがある。隣接する墓地には赤穂浪士だの、鼠小僧白吉や吉田松陰といった有名人たちの墓が所狭しと並んでいる。ここを訪れた人のなかには積もり積もった怨霊の冷気に当てられて逃げ出してしまうひとがいるくらいだ。

その墓地の入り口には杉田玄白が日本ではじめて小塚原で腑分けをしたという記念碑がある。玄白がターヘルアナトミア（解体新書）という外科の医学書をオランダ語から日本語に訳したのは広く知られていることだが、訳すに当たり、実際に本を持ち込んでその情報が正しいかどうかを腑分けして確かめたという。だが、玄白の「蘭学事始め」を読むと、実際に腑分けをしたのは玄白ではないことがわかる。前もって約束していた寅吉は都合でこられず、代理でおじいさんがきた。彼は各種の臓器を手際よく腑分けし、これは心臓、これは肝臓、というふうに玄白に説明していった。つまり、腑分けは杉田玄白がはじめておこなったのではなく、ずっと以前からかわた身分の人々によっておこなわれていたわけだ。無論そんなことは記念碑には書いてない。だが牛や馬の解体や人体の腑分けをしている彼らは、実は臓器をとりだして製薬に使っていたらしいという。牛馬の解体には詳しい動物の知識が伴ってくるので獣医の心得も必要となる。人間の死体処理にかかわっていれば、外科的な技術をもっていても不思議ではない。近代化にともあって「外科医」として部落をでてゆく人々は少なくなかったらしい。ちなみに、木下川の被差別部落の人々は、座談会で「明治以降、このあたりから医者になってでていくひとは多かった」と述べている。

欧州でもインドでも、外科的な手当ては元来賤しい仕事とみなされていた床屋や死刑執行人などがおこなっていたらしい。彼らは外科的技能に加えて製薬技術の知識として持っていることが多かった。また、祭司をおこなうこともあった。インドの「床屋カースト」の場合、一般のカーストであれば、火葬場までついていって死者を弔う儀礼をおこなうことにもなっている。南ドイツの事例では、死刑執行人は１８世紀までは「不名誉な仕事をする人々」としてカーストのように集団内の結婚しか認められておらず、一般市民との結婚は許されていなかった。市民の必要条件である同業者組合（ギルド）を結成することができず、城壁のなかに住むことも拒否されていた。だが彼らは徴税人も兼ねることが多く、教育もあり、「副業」によって、裕福でもあった。その副業というのが病気治療や動物の臓器や人間の臓器からつくった薬の売買だった。死刑執行人の手は罪人の死体に触れる「ケガレ」た手でありながら、その「異能性」により、特別の「癒し力」があると信じられた。つまり医者でもあったわけだ。

日本のかわた集団のなかにも医者や薬屋として名をはせ、代々豊かな家もあった。この集団から明治以降、被差別部落を出て一般地区に移り住み、正規の医者や薬剤師になる人々が輩出したとしても不思議ではない。徳川幕府は武具にはかかせない皮革を調達し続けなければならず、皮なめしという職種を公認しなければならなかったが、普通の農民には牛馬解体を認めず、かわたという専門集団にのみそれを許した。半面、身分を農民の下に置き、「アウトカースト」として差別し、一般農民を監視する役目も負わせた。だが皮なめしという特殊な技術は現金を稼ぐ手段でもあった。その為、農民よりも暮し向きがよい家もあり、かわた集団の人口は増えていった。頂点に立つ頭クラスやその直接の配下であれば、十分な富の蓄積はできたはずだ。こうして幕末から明治維新にかけて成立していた集団内の富裕階層のなかには日本の近代における皮革産業の担い手となっていった人々もいたのだろう。

３．　革のまち

「あそこで１９９５年に國松警察庁長官が狙撃されたんですよ。」藤沢さんが指さす先には隅田川のリヴァ―サイドを見下ろす高層マンションがたちならぶ。犯人はまだ見つかっていないが、おそらくオウムが捜査をかく乱するためにやったのだといわれている。その日いつものように自転車で事務所にむかっていた藤沢さんは警官に何回も呼び止められ職務質問された。呼び止められるごとに、何度も同じ話を繰り返さなければならなかった。狙撃者が自転車に乗って逃走したし、部落をその時間帯にうろついているから、「アヤシイ」というわけだ。「事件があってから１時間以上たってるのに、ここらをうろうろしている訳ないでしょう」。と藤沢さんは間抜けな警官たちを憐れんだ。ボスが狙撃されて慌てふためいて、混乱していたのだろう。いずれにしろ、あの「リヴァ―サイド」の高層マンション群の住民たちと、隅田川のこちら側の住民達とはまったく接点がない。

「まあ、そういうところを犯人は下見していて計算してたんだろうね。だから、狙撃してからも悠々と自転車をこいでこっちにきて、ここから大通にでて、人ごみにまぎれて逃げおおせることができたのさ。ここいらは狭い小路が多いから車じゃ追いかけられない。自転車がベストだ。それに警察をあまり信用してないから、すすんで情報を提供する人間はいないだろうし。」

藤沢さんによると、「先住民族」たるかわづくりのまちに、あとから入ってきた一般地区の人々が「皮の臭いがひどい、引っ越せ」と嫌がらせの電話をかけてくることも多いという。なめし工場のオーナーのなかにはいやがらせの無言電話を何度も受けた人もいるというが、警察がなにかしてくれたことはないという。

皮なめし工場をめざして歩いていると弾左衛門改め弾直樹が開いていた靴工場の跡地という表示がみえた。弾は明治４年にはやくも米国人チャールズ・ヘンニンゲルを指導係として雇用し、滝ノ川に皮革･靴伝習所を開いた。だが、翌年１月、隅田川に水を求めて製靴所を台東区橋場（現在の東京都人権啓発セ

ンターあたり）に移している。だが、皮革事業は振るわず、結局南千住の自宅敷地内に製革部門を移し、製靴工場を台東区今戸（現在の台東商業高校あたり）に移している。そのあたりを通ると、古びた昭和の建物や工場群が立ち並んでいて、タイムスリップしたかのような感覚を味わう。その一角にある工場に、藤沢さんは私たちを連れていった。

工場はピット（浴槽）とドラムの両方を備えていて、高級品に使われる天然なめしと量産できるクロームなめしの両方をやっているらしかった。天然なめしにはミモザや樫の木の皮、シューマックの樹皮など「渋」（タンニン）がある植物剤や小麦、鳩の糞なども使われる。出来あがった革はきなり色のやさしい色に染まる。そのまま加工したり、別の色に染めたりする。天然なめしの革は経年変化を楽しむことが出来る。年月を経てもぼろぼろにならないので高級品として人気がある。だが、完成までに最低３カ月以上かかる。

４．皮なめし人は高度なスペシャリスト

浴槽に何度も原皮をつけては引き上げをくりかえすのは重労働なのだが、欧州では、実は皮なめし職人は近代化以前は一番健康な労働者だった。なにしろ中世に欧州を襲った黒死病にかからなかったのはなめし職人くらいなのだ。それはなめしの効果を早める酵素がふんだんに含まれている鳩や犬の糞尿、タンニンを含む樫の樹皮やシューマック、ミモザなどが混合すると、特殊なカビが発生するが、それは実はペニシリンだったからだ。重い皮を担ぎあげて何度も移動させたりピットにつけたりするだけでなく、犬や鳩の糞尿を集めなければならないので「ひどい仕事だ」とはいわれていたが、実は思いのほか健康だった。欧州でペストが１４世紀の半ばに流行したとき、ロンドンの市民がいちはやくなめし人たちがペストにかからないことに気付いた。「なめし工場の近く

にすめば黒死病にかからないらしい」と、人々はテムズ川の向こうにあるなめし工場の近くに移り住んだという。

天然なめしは時間がかかり、革をつくるには最低半年、ひょっとすると１年近くもピットに浸け置きしなければならない。かつて革づくりは農民が農閑期にやるものだったが、それでも１年間もちこたえられる資本がなければならなかった。臭気や水の必要性からしてまちなかに住むことは許されなかったが、なめし工場をもっている人々のなかには市長や市議会の議員になった人もいた。「革」が儲かるビジネスで、彼らはいわゆる「ジェントルマン」だったからだ。無論実際になめし業をする労働者はそこまで恵まれているわけではなかった。だが、革の需要が伸びていくに従い、なめし人になりたいと望む若者はギルドで訓練を受けるようになっていった。

なめしの方法が劇的に変化するのは１９世紀の末だ。必要に迫られ、なんとか早くなめそうと、北米で塩基性硫酸クロムという化学溶剤でなめす手法が開発された。この結果、劇的になめしにかかる時間が短縮された。だが、天然なめしの時代と大きく変わったことは工員の健康被害だった。クロムは有害物質で、発がん性もある。なめすときに硫酸も使う。天然なめしの場合と違って有害物質を含む排水はちゃんとした処理が必要だが、排水処理の技術が一般化するのは１９８０年代以降だ。この為、有害物質をつかうようになって以来、労働者の健康も疎外されるようになった。今日本の工場では厳しい環境規制や労働者の健康を守るようにされているが、途上国のなめし工場では相変わらずクロムによる健康被害が続いている。

ピットの上に吊るされた原皮をなめす液体は泡立った濃い液体で、天然溶剤とはいえ、悪臭がある。肉片や毛がついている原皮の臭いと相まって強烈な臭

気が作業場に漂っている。イタリアからやってきた女子学生は、被差別部落の識字運動について調べたいといっていた。だが、彼女はこの臭気にやられて、外から中を覗き込んでいたが、どうしても中にはいることができない。一階の見学を終えて二階にあるアイロンかけと裁断をする作業場にゆくことになって、やっとほっとしてついてきた。イタリア人の可愛らしい女子学生をみると、働いていた若い労働者たちは、ラジオをつけて、いきなりクラシック音楽を流しだした。みると従業員は全員外国人労働者で、南米出身らしかった。

自転車を押しながら速足で歩く藤沢さんを学生たちは息をきらせながら小走りで追いかけていく。いきついた先は男女同権プラザだった。長老たちがそこで部落の歴史を話してくれた。江戸時代、足立区周辺にはリサイクルで紙づくりをする非人集団が住んでいた。農業でつくりだされる藁をひきとって廃品回収ででた古紙を溶かして藁をまぜて再生紙をつくっていたという。不要な藁を使ってくれるので農民たちには歓迎され、共存していたという。一方荒川区や台東区では明治以降は革が生産されていたものの、たびたびの移動を余儀なくされた。大量に水が必要とされるので川沿いに住まねばならないが、行政府は「衛生面の配慮」といった難癖をつけて、東京が拡大するたびに周辺に追いやってゆく。近代化には不可欠な皮革産業でも、やっかいもの扱いだったのだ。

説明を聞きながら、スゥエーデンからきた学生が口を開いた。「日本製の革というとヨーロッパではトップクラスだとみなされています。だからすごい近代的な工場で作っていると思ったのに、あんな小さな古びた工場でつくっているのでショックをうけました。いったい近代ってなんなのかと考えさせられました。」

　フィリピン人の学生が口を開く。「僕はニューヨークのコロンビア大学で勉強しているので、ハーレムに近いのですが、アメリカでははっきりと所得によって住み分けができているのを感じます。ところが東京っていうのは地価が高

いからでしょうか、貧しい地域のなかに高級マンションが突然建っていたりする。おまけにこの両者がなんの関係ももたずに併存することもできるのですね」

藤沢さんは留学生たちがみつけた「東京のフロンティア」のイメージを面白がっていた。そして数年前に部落を訪れた日系アメリカ人の青年のことを話しだした。「部落問題に興味をもって、うちの事務所にやってきたんだよ。それで、親戚がこの近くに住んでいたらしいっていうんで、苗字をきいたら、間違いなくこの川向こうに住んでいる一族だったよ。その学生はなんだか自分のルーツをみつけてうれしそうだったね」

その話を聞きながら、私はこのクラスに参加してきた日本人の女子学生のことを思い出していた。「なぜこの授業を選んだのですか」と聞くと、最近自分の父が被差別部落出身だと知ってショックを受けたという。差別されたことはなかったし、父の家は裕福だったらしいので、自分にはわからない。なぜ皮革に携わってきたというだけで、日本では差別されるのか。部落についてすべてを知りたい。よどみない英語で単刀直入にそう話したが、そのあと授業からは消えてしまった。「今すぐすべてを知りたい」と結論を急ぐあまり、落ち着いて授業を受けられなかったのだろうか。

　だが結論を急ぐ彼女にぜひともこのツアーに参加してほしいと思っていた。米国からやってきた日系アメリカ人の学生が「ご先祖様」のルーツを発見してうれしいと思ったのは、米国では皮革づくりについての偏見がないからだろう。海外のマイノリティ集団のなかには集団で皮革の世界を世襲業として取り込んで、大きな成功を収めた人々がいる。これから連載で扱おうと思うのは、なかでもユダヤ人や華僑の客家、そしてインドのイスラム教徒たちだ。皮革はとても高い技術が必要とされ、末端の利益が大きいので、ひとたびその過程をネットワーク化してしまえば社会的な成功を収めることが出来る。ちなみに、英国では皮なめし人の地位は決して低くなかったというと、藤沢さんが、それはな

ぜなのか、ぜひ知りたいという。結局そこから私の皮革にかかわった海外の集団の比較研究がはじまった。

５．皮職人のプライド

「なめし人ギルドは今でもロンドンにありますが、多くはもう銀行家とか別の事業にうつっているんですよ」とイギリスでいわれたことがあった。途上国に安い革の生産が移行してしまっただけでなく、皮革業で儲けた資金を利用して銀行業などの他業種に移っているのだそうだ。だが、それでも皮なめしギルドの成員資格を手放そうとしないのは、ご先祖様の刻んだなめし屋の歴史について誇りを抱いているからだ。

英国のチェシャーにいったとき、そこの天然なめしの工房で働いている技術者と話をしたことがある。彼は博士号をもっているなめし人だったが、代々なめし人の家系の生まれで、少なくとも３００年はさかのぼれるという。彼の周囲にはなめし人の家系からではない人々も含まれていたが、「古い家系の人々」に訓練をうけた新しい人々が混じり、一緒に働いていること自体が素晴らしいことだと私は感動したものだ。

あらゆる先進国がそうであるように、皮革づくりがたとえ斜陽産業になっても完全になくなることはない。ドイツの皮革博物館の館員は、国産の最高級車のシートはやはり自国産の最高級の革で覆われなければならないし、柔らかくて弾力のある革は土地の最高のなめし技術でなめされなければならないといっていた。日本人の足にあった最高級の靴や革のジャケットもやはり国内産のなめし皮をつかわなければできないだろう。日本が本気で皮革をつくればやっぱりトップクラスのレベルのものをつくりだせる。これは誇らしいことではないだろうか。

革づくりとしての専門性に立脚して生きてきた専門集団の歴史を紐解き、そのなかにみられるプライドや悲哀を理解してみることが、国際交流の第一歩でもあり、この連載の目指すところだ。